

自由への渴望

リンニャントン

自由というのは、やりたいことを妨げられることなくできる、自分の意志通り選択できるという意味です。自由というのは誰かに定められるものではなく、人間はだれでも自由に生きられると1948年12月10日、パリの国連総会で採択された「世界人権宣言」に記されています。つまり、人間の自由というのは、その人にゆだねられた自己決定権です。しかし、平和で自由を脅かされていない時、人は自由の意味や価値を忘れがちです。自由への渴望というのは、その人が自由を失った時に理解できるものです。

祖国ミャンマーはおよそ50年間軍事独裁政権の下で市民の生活、教育、宗教、個人情報、さらに自己決定権まで独裁者に制限されてきました。2010年11月に総選挙が行われ、民政移管という名の下で鎖国だったミャンマーは50年ぶりに民主主義の空気を吸うことができ

ました。しかし、それは100%民主主義という  
ものではありません。なぜならば、国会の議  
員を選ぶ総選挙でも、25%は軍人だからです。  
それは、市民の意思とは関係なく、軍が任命  
するのです。つまり、ミャンマーの民主主義  
は自由の一部に触れただけすぎなのです。

しかし、ミャンマーの人々はその民主化か  
ら得た一部の自由から、自由な経済、自由な  
教育、検閲のない自由な制作、そして自由な  
人生に触れました。SNSで興味のある情報を発  
信したり得たり、思うままにアートや音楽を  
創造し、好きな仕事を選び、テクノロジーを  
自在に使ったりして、かつてなかった自  
由な世界で生活を送りました。しかし、それ  
はたった10年で終わってしまいました。

2021年2月1日の早朝5時頃、母に起こさ  
れた私は暗闇を感じました。軍がクーデター  
を起こし市民が選んだ政治家や首脳らが拘束  
されたのです。SNSには首脳や多くの国会議員  
たちが拘束されたという情報が溢れていまし

た。その瞬間、国家に自由を奪われたと感じたのは私一人だけではなかっただろうと思います。その日、私たちの自由は誘拐されたような気がします。

自由というのは幅広く深いところで、人間一人一人の無限の夢と結びられています。それが一朝で奪われた悔しさは当事者にしか理解できないことです。2021年2月1日以来、市民たちの憤りはとどまりません。世界的なニュースなどには「軍への抵抗デモ」と書かれていますがいわば、それは「自由への渴望」なんです。

軍は自らに抵抗する者に無差別な拘束や拷問、さらには殺人までも強制的にしてきました。自分のお金の自由も、情報の自由な発信やアクセスも、政治家を自由に選ぶという基本的な市民の権利も奪われ市民の自由への欲望はだれにも止められなくなりました。

ミャンマーと比べれば日本は自由です。たとえ日本人が政府への激しい批判をして拘

束されたいし、自らの考えを表せます。私は  
自由な日本で生活を送っていますが、実り心  
はまだ不自由なのです。なぜならば、祖国で  
の軍の暴挙、ミャンマーの人々の憤りや悲し  
みを知っている私は、日本で安全で自由な生  
活をしている分、余計に心の不自由を感じず  
にはいられないのです。

自由への渴望が高まると共に、市民たちは  
積極的に革命を始め、今、祖国は戦場といっ  
ても過言ではありません。その状況を見て海  
外の人々は、和解の方法を探すべきだとしぼし  
ぼ言います。しかし革命を始めたきっかけは  
何かという問いに対して、海外の人たちは答  
えがありません。自由を失ったことがない人  
たちは、自由への渴望を本当に理解できるお  
けがないのです。その国に住んでみて、自分  
も自由を失ってはいじめてその気持ちに共感で  
きるでしょう。その気持ちの深さは当事者の  
立場から考えをい限り、真に理解できないの  
です。

自由への渴望は、専門家の本、研究者や優れた人たちの言葉で表せるものではありません。また、自由の価値も自由に生きていられるところで暮らしている人にはわかりません。自由への渴望は、自由がない時にわかるものです。私は自由のないところから来た人間であるからこそ、自由を期待している人たちの気持ちがよく理解できるのです。